

がんの痛みについて

早期のがんでも、「がんそのものの治療」を受けている方の1/3に痛みが出てきます。

終末期がんでは、2/3以上の患者さんに痛みが出現します。

がん疼痛治療を受けている外来患者へのインターネット調査で51%の方ががんの痛みを訴えることががん治療の妨げになると考えていることが分かりました。しかし決してそのようなことはありません。

痛みをがまんすると・・・

食欲が落ちる

うごけなくなる

眠れない



気持ちがふさがちになる

こういった症状が続くと、治療や検査が受けられなくなる場合もあります。

さらに痛みが増したり、不安がつのったりと身体や精神的に悪影響を及ぼす可能性があります。痛みをしっかりと抑えることは、あなたらしく過ごすための大切な要素になります。

伝えてください がんの痛み

痛みは、レントゲンなど検査で判断することができません。

患者さんからの情報がたよりになります。

痛みを伝えることが痛み治療の第一歩になります。

どこが
(場所)

出された薬
の効果はど
うだったか

どのくらい
(程度)

いつ
どんなとき
(状況)

どのように
(性質)

痛みを伝えるときの大切な点

伝えるための手段として利用できるアプリや手帳もあります。



日々の痛みなどのつらさを記録し、診察時のコミュニケーションをサポートする「つたえるアプリ」「つたえるアプリ」で検索すると表示されます



製薬会社などが配布しているご自身で直接記入し、診察時などに提示する痛みの日記帳 薬局などでもらえます

痛みは患者さん自身にしかわかりません。ですから患者さん自身の言葉で伝えることが大切です。日常生活に支障がないよう適切な治療を受けましょう。

文責：がん性疼痛看護認定看護師 木本美由紀